

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から④

緋(かすり)とは、文様分を作り、文様を織り上げの周辺にかすれたような状態を見せた織物のことをいう。経糸(たていと)や緯糸(よこいと)は、藍などの染料に染まる部分と、糸括(くく)りなどで防染処理をして染まらない白い部分

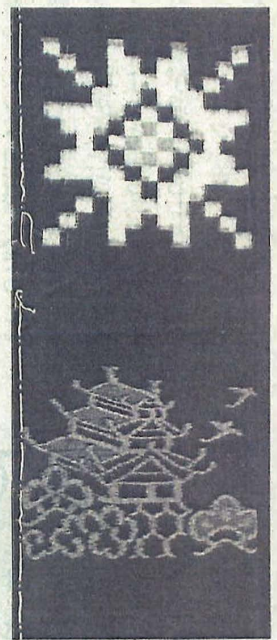
緋の文様には絵画的な絵柄と、抽象的な幾何緋に大別され、それらを組み合わせることによって多彩な緋文様が生まれる。伊予緋は、藍染めによる木綿緋が中心で、

明治以降、着物、労働着、寝具などの日常的な衣料として広く用いられた。縫い合わせていることから、来客用の蒲団カバーと

伊予緋の古布(「城と幾何」文様)

柳宗悦が著書で「秀逸」

の伊予緋の古布で、代表的な図柄として最も親しまれている「城と幾何」の緋文



城と幾何文様が美しく表現された伊予緋の古布(一部) 治時代、県歴史文化博物館蔵

秀逸

「何といっても秀逸なのは、松山城の図柄であります。日々見る郷土の風景を写し出したものとして忘れ難いものであります。下には松に囲まれた石垣を控え、上にはお城の建物が聳(そび)え、鯨(しゃちほこ)をもった屋根から、空を飛ぶ鳥に至るまで、よくも上手に織り出したものと思えます」

柳宗悦は「吾々(われわれ)はもともと日本から生まれた日本のものを愛するだけではありませんか。そうしてそれらのものを用い

「民芸運動の父」と呼ばれる思想家の柳宗悦(やなぎ・むねよし)は著書「手仕事の日本」(1948年)の中で、次のように伊予緋の城文様を絶賛している。

愛媛の風土の中で育まれてきた郷土色豊かな伊予は、こんにち、伝統的特産として親しまれている。

予緋の未来は、緋資料の存、技術の継承、後継者養成、商品開発など課題多いが、伊予緋を愛して、その良さを発信することも大切である。

本資料は、県歴史文化博物館(西予市)の特別展「予かすり 緋文様の世界」で4月7日まで展示中。